

沖縄語の表記における旧仮名の活用について（5枚）

2007年5月5日

沖縄語研究家 船津好明

「ゐ、𪛗、𪛘、𪛙」が代表的な旧仮名です。共通語では現在実用文章文字としては使われませんが、旧仮名遣いの時代にはよく使われました。沖縄語では現在も、主として文語で旧仮名遣いが生きています。筆者は、旧仮名は沖縄語の表記に向いていて、その活用を有望に思っています。

、 で「ゐ」について説明します。「ゐ」の手書きは、「る」を書く要領で一筆で書きます。「𪛘」は で説明します。

共通語（標準語）における事情

1、旧仮名遣い時代（1945年以前）の標準語における「ゐ」の事情

（1）「ゐ」の使用例

当時の標準語の文献から拾って仮名で書くと、

いぬがゐる。（犬がいる。） さうゐない。（相違ない。）

きをもちゐる。（木を用いる。） めいぢゐしん。（明治維新。）

など、「ゐ」はある時期に多用されています。

（2）「ゐ」の標準語での音韻

筆者の手元にある1928（昭和3）年の発声映画（トーキー映画をDVDに再録したもの）の音声を聞く限り、「ゐ」の字に当たる音は[i]に聞こえます。[wi]（拗音）には聞こえません。

2、新仮名遣い時代の共通語における「ゐ」の事情

新仮名遣いの始まりと共に、「ゐ」と「い」の区別は不要とされ、全て「い」に置き換えられました。そのため、「ゐ」は現在の共通語の実用文章文字としては使われません。しかし、特殊な分野や過去の文献の研究等では「ゐ」の読み書きが必要で、ワープロの文字資源の中に組み入れられました。

「ゐ」は、「わ行」の第2音として位置づけられています。ワープロのキーボードでは[w][i]で呼び出します。現在の共通語では、広告や看板等で使われ始め、復活の兆しがあります。読み方は昔のままで「i」です。

沖縄語における事情

1、現在の沖縄語での「ゐ」の使用例

「ゐ」は、実態としては非グロツタルの[wi]（拗音、英語の we の音）または[i]としての使用例がみられます。このうち、

(1) [wi]（拗音）は共通語にはありませんが沖縄語にはあり、「わ行」の第2音の本来的な音です。「ゐなく」（女）、「ゐきが」（男）などの表記例がみられます。非グロツタルですから、「ゐーりきさん」（楽しい）と書くのは不適當で、「ゐなく」と書くのとは両立しません。

(2) [i]と読むのは、旧仮名使い時代の標準語の「ゐ」の読み方をそのまま使っているものです。ただし、すべての[i]が「ゐ」と書かれるわけではありません。「やみびいん」のような書き方を見かけますが、この中の「ゐ」と「い」は共に[i]です。書き手の趣向と思われます。

2、「ゐ」の表記上の問題点と打開策

「ゐなく」と書いて[winagu]と読めば、上の(1)の意味で言文一致です。また、「ゐなく」を[inagu]と読めば、上の(2)の意味で言文一致です。

「ゐなく」と書いて、例えば首里言葉で[winagu]、那覇言葉で「inagu」と読むとすれば、一見都合がよいように見えますが、問題があります。我々は沖縄語を普及させようという、未曾有の事態に直面しています。対象は沖縄語が未熟な人々です。「ゐ」を一字2音として、**学習者に[wi]か[i]を選ばせるのでは、学習者は判断に困る**と思います。教える側も迷うのではないのでしょうか。これに似た事情は「ゐ」以外にもあります。この種の一字2音は、「いん（犬）」の「い」と「すい（首里）」の「い」の音違いによる一字2音とは根本的に異なります。共通語で「ゐ」を[i]と読んだのは、[wi]の音がなからです。沖縄語としての「ゐ」は、共通語の感覚ではなく、沖縄語の世界で考えるというのが、筆者の考え方です。そのため、学習者向けには、「**ゐ**」の読みは**非グロツタルの[wi]（拗音）一つとするのが適切だ**と思いますが、併せて[inagu]の語頭はどう書くかの解決も必要です。「い」と書くと、「いん（犬）」の「い」と区別できなくなって、また困ります。更にグロツタルの[?wi]の書き方の問題や拗促音の小書き文字の問題も絡んで、行き詰ってしまいます。

これを解決するには、単語の語頭にくる非グロツタルの[i]の仮名を新規に開発して選択使用するのが、沖縄語の将来にとって最も賢明である、というのが筆者の調査と研究の結果です。各位と一緒に考え、解決できれば幸いに思います。

色々な考え方に対してどれが最善かは、学習者の学習負担のほか、教える側がしっかりと納得できるかどうかにもよります。どんな試みも新たに学ぶものですから、学習負担は皆無とはいきませんが、学習負担が初期の一時か、後々付きまとうのかによって判断が異なると思います。

「ゑ」について

手書きは「る」を小さめに書いてそのまま筆を離さず、左下に引いて右に波のような形を辿ります。一筆で書きます。

1、共通語（標準語）における事情

旧仮名遣い時代の標準語の文献をみると、「ゑ」の使用頻度は「ゐ」ほど多くありません。使用例を見ると、

ほほゑむ。(ほほ笑む。) ゑをみる。(絵を見る。)

などがあります。共通語では新仮名遣いになって「え」に統一されました。

「ゑ」は、「わ行」の第4音[we]として位置づけられています。ワープロのキーボードでは[w][e]で呼び出します。現在の共通語では研究、看板、人名などは別として、実用文章文字としては使われません。読みは昔のまま[e]です。

2、沖縄語における事情

「ゑ」は沖縄語で役立ちます。「**ゑ**」の読みは**非グロツタルの[we]とするのが適切と考えます**。沖縄語の文語の伝統的な書き方では、[e]の段の仮名（短音）は[i]と読む傾向となっていて、「ゑ」は「ゐ」とよく対応しています。例えば「ゑけり」と書いて、読みは[wiki]で、全く言文不一致です。言文一致式に書けば「ゑきー」（姉妹からみた兄弟）となります。沖縄語の文語はそういう事情にありますから、現在の口語で使うときは、「ゑ」の音は[wi]ではなく、[we]であるべきだというのが、筆者の論です。それはそれとして、沖縄語では語頭の非グロツタルの[we]の言葉は少なく、むしろグロツタルの方が多いので、その方の字を別にしなければなりません。ですから「ゑんちゅ」（ねずみ）と書くのは不適切となります。そこでも「ゐ」の場合と同様に、グロツタルの[?we]の書き方の問題や小書きの拗促音の問題も絡んで、行き詰まっています。

前記の「ゐ」と同様の理由で、沖縄語独特の発音に適切に対応するためには、必要な仮名を新規に開発して選択使用するのが、沖縄語の将来にとって最も賢明である、というのが筆者の調査と研究の結果です。各位と一緒に考え、問題の解決ができれば幸いです。

（参考1）共通語の50音表について

仮名の一覧表で、48字あります。50字ではありません。a,i,u,e,oの5段8行で40字、や行3字、わ行4字、「ん」1字で計48字、このうち「わ行」に旧仮名2字が含まれます。一部の仮名に一字2音のものがあり、更に濁音、半濁音、拗音を加えると、音はずっと多くなります。それぞれに平仮名と片仮名があります。

(参考2) 共通語(標準語)におけるグロツタル音と非グロツタル音、およびこれらと沖縄語との関係

共通語にもグロツタル音と非グロツタル音がありますが、誰も意識しません。どちらで言っても意味は変わりません。個人差はありますが、筆者は大和人と話をしている、その人の「う」や「お」が明瞭なグロツタル音だと気付くことがあります。もちろん本人は無意識です。共通語の単語の語頭の母音は概ねグロツタルかそれに近い感じがします。そのため、沖縄語の「あ、い、う、え、お」はグロツタル音の字とし、非グロツタルの場合どう書くかを考えるのが自然の立場と思います。子音はむしろ逆で、グロツタル音と非グロツタル音のある子音(「や、わ、ん」など)は、現在の仮名を非グロツタル音とし、グロツタル音は別に工夫するのがよいように思います。

(参考3) 日本語の表記の仕方の経緯

明治以後、学校が普及し教科書が用いられましたが、表記法そのものに深刻な問題はなかったようです。読み手が全て話者であったためと思います。

筆者の手元に明治10年代(1880年頃)の学者向けの書籍があります。漢字交じりの片仮名文で旧仮名遣い、小書き文字なし、濁音の文字に濁点なし、漢字に振り仮名なし、句読点なし、次の文との間に空白なしで、1頁に片仮名と漢字が隙間なく詰まっているものです。日本語が堪能な人なら問題なく読めますが、未熟な人には読めないと思います。

昭和初期(1930年頃)の書籍もあります。これをみると、漢字交じりの平仮名文で旧仮名遣い、小書き文字なし、濁音の文字に濁点あり、全漢字に振り仮名あり、句読点ありで、前書の書法とは大きく違っています。この二つがそれぞれの時代に受け入れられたのは、いずれも読み手が堪能な話者であったからだと思います。堪能な話者であれば、書き手の都合で書いた大抵の文を読みこなすことができます。このように、旧仮名遣い時代には、時期により書き手により大幅に書法が異なることから、当時は現在のような国語の書き方の一般指導書のようなものはなかったと、筆者は推測しています。

翻って沖縄語の学習者向けの書法を思うとき、読み手は沖縄語の堪能な話者ではない、ということをお忘れではありません。

(参考4) 標準語における新仮名遣いへの転換

「ゐ」の発音は、遠い昔のことは分かりませんが、昭和の時代(1920年代後半以後)は、「い」と同じ音と考えられ、戦後間もない新仮名遣いの制定のとき、これらを区別する必要はないと判断され、「ゐ」の実用を廃して「い」に統一するなどの改革が行われました。新仮名遣いは標準語の大きな進化を意味します。

(参考 5) 沖縄語の表記の経緯

戦前から、主として文語で、標準語の文字を使って書いていましたが、標準語の新仮名遣いへの転換があっても沖縄語は影響を受けず、旧仮名遣いは戦後も続きました。やがて口語、散文が書かれるようになりましたが、仮名には旧仮名も含めて有志が思い思いの書法で書いているのが実態です。

沖縄語に関する船津好明の最近の論文リスト

- ・ 沖縄語普及の一層の推進について (9 枚) 2 0 0 7 年 3 月 5 日
- ・ 沖縄語普及協議会の書法の試行結果について (4 枚) 2 0 0 7 年 3 月 6 日
- ・ 沖縄語の学習のための漢字の使い方の例 (5 枚) 2 0 0 7 年 3 月 2 8 日
- ・ 沖縄語の中の漢字への振り仮名と送り仮名の例 (2 枚) 2 0 0 7 年 4 月 1 1 日
- ・ 沖縄語の学習のための漢字について (第 1 次案) (3 枚) 2 0 0 7 年 4 月 1 7 日
- ・ 沖縄語の表記における長音の表し方について (3 枚) 2 0 0 7 年 4 月 2 9 日

照会先 : 〒1870002 東京都小平市花小金井 2 - 6 - 1

船津好明

Tel/Fax 042-467-1273

Email funatsu@mvf.biglobe.ne.jp